

『資本論』第I巻

第一章 第三節「A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」

「一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態」 pp.(63-4)

経済専攻経済理論コース M1

奥谷 優人

次の等式

x 量の商品 A = y 量の商品 B (x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する)

具体例を挙げた検討。

■一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

20 エレのリンネル = 1 着の上着 (20 エレのリンネルは 1 着の上着に値する)

- ・ここでリンネルの価値は上着によって「相対的価値形態」で表され、上着は等価に置かれている。
- ・リンネルの価値はリンネル自身によっては規定できない。ここでは上着がリンネルの価値を相対的に表現しているが、価値表現の材料を供給しているのみで、上着自身の価値を表しているわけではない。
- ・つまり、ここではリンネルの相対的価値は上着との等価形態によって表されている。
- ・逆も然り。だが二つの商品は、その相対的価値の表現において互いに依存し合っている。
- ・このとき、一つの商品が同時に「相対的価値形態」であることと「等価形態」であることは両立できない。

■疑問

- ・マルクスは右辺と左辺の役割の違いを議論しているが、等式の意味（数式の厳密性）をむしろ曖昧にしているのではないか？
- ・上の恣意的な等式表現において、なぜ異なる二つの商品がイコールとして等置されるのかの推論過程がなければ、ある商品の価値を他方の商品が表現するという思考の根拠に乏しいのではないか。→久留間の議論に続く

参考文献

久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年